
ラフ・メイカー

-彼方-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラフ・メイカー

【NZコード】

N8916G

【作者名】

-彼方-

【あらすじ】

ラフ・メイカー【Laughmaker】・笑わせる人。

ラフ・マイカー 【起】（前書き）

これは某男性バンドグループの曲を勝手に小説にしたもののです。

ラフ・メイカー【起】

「君、もう明日から来なくていいよ」

事実上、解雇ということだ。

上司にそういう言われたのは、何日前のことか。もはや日数など何の意味もない。

その解雇の理由が、社員の削減のためだつた。

ということは俺には非がないにも関わらず、リストラされたことになる。

そんな風に冷静に考えられるほど、俺の精神は正常だつたかどうかと聞かれれば、何も答えられない。

幼い頃に父親を亡くし、母と自分で約20年暮らしてきた。自分が働き始め、収入も安定したお陰で母に何とか楽させてやれると思つた矢先の解雇だ。

解雇されたことを母に伝えた数日後、母は倒れた。

そのまま寝たきりの日が何日か続いた。

元々体が弱かったのだから、今回もそんな体質が影響にあるのだろうと思つた。

病院に行こうと母に提案するも、そんな金があるわけないだろうと

言われて、俺は返す言葉を見つけられずに終わる。もつ何度もそんなやりとりを繰り返した。

俺はコンビニでアルバイトをし、他に道路工事のアルバイトもした。それでも、2人分の生活費には到底届かず、毎日あらゆる面で節約する術を考える日が続いたが、やはり間に合わず、借金をつくりた。

しかし数週間後、母は肺炎にかかり、息を引き取った。

解雇。母の死。借金。

それらが頭の中でグルグルと渦巻いてる。もう、どうしていいのか分からなかつた。

母の葬式は、凍てつくような寒さの中行われた。

元同僚や元上司が来てくれた。解雇されなければもっと多くの人が集まつたのだろうかと無駄なことを俺は考えていた。

とてつもない喪失感に襲われた。

しかしそれは、葬式が終わって、家の中に入った瞬間からさらに大きくなつた。

玄関を開ければいつも母が出てくれた。最初はうつとおしいな
どと思っていたが、最近は少しずつ嬉しくもなってきていた。

それが今はなく、ただただ空しく耳鳴りが頭の中で響くだけだった。

その瞬間、玄関に足を踏み入れた瞬間涙が溢れた。

その場で座り込み涙を流した。

もう何もかもが、全てが嫌になつた。どうでもよくなつてしまつた。
何故泣いてるのかと聞かれても、何も答えられなかつたと思う。自
分でも分からないのだから、他人にはもつと分からない。そのくせ
に誰かに助けてもらいたくて、それで泣いたのかもしれない。

ラフ・メイカー【承】

どれだけ泣いたのか、時間の感覚が一切感じられなかつた。

そのとき、玄関にノックの音が転がつた。

『こんな顔じゃ誰にも会えないな・・・』

そう思つた俺は、ドアを開けずに「・・・どちら様?」とだけ応答した。

すると返つて来た言葉は以外なものだつた。

「名乗る程大した名じやない」

本気で殴つてやるつかと思つたが、そのあとに続いた言葉にそれらの感情は全て消え去つた。

「誰かがこう呼ぶんだ。『ラフ・メイカー』つてね」

ラフ・メイカーだと?ふざけるな。冗談じやない。そんなモン呼んだ覚えはない。

あんたが俺をまた会社に入ってくれるのか?借金を帳消しにしてくれるのか?母を生き返らしてくれるのか?

「それは無理だ。だけど、アンタに笑顔を持つてきた」

笑顔？冗談じやない。いいから。俺に構わず消えてくれ。

つい声を荒げた。興奮しているのは間違いなかつた。

数十分、俺はまた泣いた。興奮したのも合わせて、本当に涙が大量に溢れた。

そしてまた、ノックの音が響いた。心なしか、それは少し弱々しかつた。

『あの野郎。まだいやがつたのか』 そう思つた俺は、もう一度叫んだ。

「消えてくれつて言つただろ」

それに対しても返ってきた言葉は、先ほどとは打つて変わって、沈んでいた。

「そんなことを言われたのは初めてだ」

知るかそんなこと。と思ったが、ラフ・メイカーは続けた。

「哀しくなつてきた」

やつして、最後にボソコと呟くよつこ」・・・泣きやつだ」と言つた。

「冗談じゃない。あなたが泣いてどうする。泣きたいのは俺の方だ。

そう言つた語尾は、ほとんど泣いてた。

一人分の鳴き声は、部屋の中に響き、外にも響いた。

薄いドアを挟んだしゃつくり混じりの鳴き声は、すっかり疲れていた。

疲れて、泣くことも億劫になつた今、俺はラフ・マイカーに話しかけていた。

「今でも、俺のことを笑わせるつもりか？」

「それだけが生き甲斐なんだ。笑わせないと帰れない」

そう言つたラフ・マイカーは、不思議と嬉しそうだつた。向こう側ではすでに笑顔なのかもしれない。

思えば、俺を元気付けると言つて来てくれたにも関わらず、家に入れず、寒い中ずっと粘ついてくれている。

申し訳なく思えてきた。今ではもう部屋に入れてもいいかななんて思いも出ってきた。

俺は、カギを開けて、チャーンも外して、ドアを開けようとした。力を入れた。

しかし何度も、どれだけ力を込めてもドアは開かなかつた。

俺はラフ・マイカーに、そつちから押してくれと頼んだ。

あいつなら喜んで返事をするだろうと思つていた。いや、それはも

う確信の域だつた。

なのに、いつまで経つても返事が聞こえない。

試しにもう一度声を掛けたが、やはり返つてこなかつた。

どうしたんだ？おい。まさか。

「冗談じゃない。今更俺一人置いて消えやがつた。

思い違いか何かなどとは考えなかつた。信じた瞬間裏切られた。その感情だけが脳を支配していた。

クソ！

ガン、とドアを思い切り蹴飛ばした。

それとほぼ同時、居間の窓ガラスの割れる音が響いた。

何事かと思い居間に行くと、そこには眼を赤く泣き腫らした男がいた。

その男の手には鉄パイプが握られていた。

「あんたに、笑顔を持ってきた」

泣き顔で、そう言った。

不法侵入したそいつは、小さな鏡をポケットから取り出した。
それを服の袖で拭いてから俺に突き出した。

「あなたの泣き顔、笑えるぞ」

俺は呆れた。何言つてやがる。そう思いながら、鏡を覗き込んだ。

なるほど。確かに笑了。

ラフ・マイカー【転・結】（後書き）

終わりです。他の小説が行き詰っているので、書いてみました。

実際の歌とは違う部分もありましたが、どうかご了承下さい。

最後まで読んで頂きありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8916g/>

ラフ・メイカー

2010年10月10日00時03分発行